Haruo Kubozono, Junko Ito, Armin Mester "On'inkôzô-kara mita go-to ku-no kyôkai: fukugô-meishi akusento-no buneseki"
["The word/phrase boundary from the perspective of phonological structure: the anaylsis of nominal compound accent"]
In Bunpô-to onsei. Speech and Grammar. Edited by the Spoken Language Research Group. Kurosio Publications, Tokyo, 147-166.

#08

8. 音韻構造から見た語と句の境界：複合名詞アクセントの分析*

窪薗晴夫・伊藤順子・Armin Mester

要旨

日本語(東京方言)の複合名詞を韻律構造の観点から考察すると、「南ア˥メリカ」のように二要素が一つのアクセント単位に完全に融合した構造のものと、「チェ˥コ・スロバ˥キア」のように、二要素が融合せず、それぞれ独立したアクセント単位を形成する構造の二つのタイプ(種類)に大別できるとされてきた。本稿では、この二種類の韻律構造に加え、「南カリフォルニア」や「大作曲家」のように、前部要素は自立性を失い後部要素に融合しようとしながらも、後部要素は自らのアクセント型(accentuation)を維持し自立性を保とうとする第三のタイプの韻律構造が存在することを指摘し、この中間的な韻律構造が後部要素の音韻構造や複合語全体の意味構造によって決定されることを実証する。

1. はじめに

まず(1)の二つの複合名詞を発音してみよう。

(1) a. $[[\text{サッチャー}]_N[\text{政権}]_N]_N$
b. $[[\text{サッチャー}]_N[\text{首相}]_N]_N$

これらの複合名詞は「サッチャー」という前部要素に「政権」、「首相」という無核(=平板)の語が結合したものであるが、両者の発音は明らかに異なっている。アクセント核(˥)というピッチ(高さ)の落ちるところに注目すると、(1a)では後部要素の語頭に核があり(つまりピッチが落

ち)、(1b)では「サッチャー」という前部要素の語頭に核がある[1)]。

(2) アクセント構造

a. サ゛ッチャー ＋ セイケン → サッチャーセ゛イケン

b. サ゛ッチャー ＋ シュショウ → サ゛ッチャー　シュショウ

両者の違いは、核位置の違いだけではない。より本質的違いは、複合名詞を構成する二要素が音韻的に一語にまとまっているか否かという点にある。つまり、(2a)は構成要素が独自のアクセント型(accentuation)を失い、一つのアクセント単位にまとまっているのに対し、(2b)は各要素の本来のアクセント型を保持したままで、一つのアクセント単位に融合してはいない[2)]。音韻的な一語性を括弧(　)で表すと、両者の違いは(3)のように表すことができる。

(3) 韻律構造

a. (サッチャー政権)

b. (サッチャー)(首相)

(3a)は、形態・意味・音韻いずれの面からも二語が一語化している複合名詞である。これに対し、(3b)は形態・意味の面からは一語化していると言えても、音韻的には一語化していない。つまり音韻的には語と語が連立した「句」の構造をなしている。本稿では、日本語の複合名詞に(3a)と(3b)の中間的な特徴を持ったものが存在し、よってアクセントという音韻的な視点から「語」と「句」の境界があいまいであることを指摘する。このことを実証するために、まず複合名詞アクセントに関する先行研究を紹介し、(3)の二つのタイプの音韻構造を解説したい(第2節)。次いで第3節では、従来の分析では説明することのできない複合名詞が存在することを指摘し、これらがこれまで存在が指摘されてきた二種類の複合名詞の中間的な音韻構造を有することを明らかにする。さらに第4節では、この新しいタイプの複合名詞アクセントを含め、三種類の複合名詞アクセントが後部要素の音韻構造(特に音韻的語長)や複合名詞全体の意味構造などの条件によって決定されることを

明らかにしたい。

2. これまでの研究

2.1 複合名詞アクセント規則

通常、複合名詞ないしは複合名詞アクセントという場合には、二語が一つのアクセント単位に融合した(3a)タイプの複合名詞を指している。東京方言の場合、複合名詞のアクセント型は後部要素の音韻構造——具体的にはその長さと本来のアクセント型——によって決定される。前部要素は、もともとアクセント核を有している語であってもそのアクセントを失うため、後部要素が同一であれば、どのような語と結合しても、原則として同じ複合語アクセント型が作り出されることになる。「州」という語を例にあげると、その直前(つまり前部要素の最後)の音節にアクセント核を置く統一的な型が生じる[3)]。

(4) a. ユ˥タ ＋ しゅ˥う → ユタ˥州
b. ネ˥バダ ＋ しゅ˥う → ネバダ˥州
c. アリゾナ ＋ しゅ˥う → アリゾナ˥州
d. オクラ˥ホマ ＋ しゅ˥う → オクラホマ˥州
e. カリフォルニア ＋ しゅ˥う → カリフォルニア˥州
f. ウィスコ˥ンシン ＋ しゅ˥う → ウィスコンシ˥ン州
g. ノースカロラ˥イナ ＋ しゅ˥う → ノースカロライナ˥州

もう少し具体的に見ると、従来、複合名詞は後部要素が2拍(モーラ)までのものと、3拍以上のものに大別され、両者には異なる規則がかかるとされてきた(秋永 1981;佐藤 1989;上野, 近刊)。これらの規則を「複合名詞アクセント規則(Compound Accent Rule)」と総称してきたのである。このうち2拍までの「短い」後部要素を有する複合名詞には、(5)の三つのアクセント型があるとされている。このうちもっとも生産性が高く無標と考えられるのが前部要素末にアクセント核を置く(5a)の型である。これに比べ、後部要素のアクセント核をそのままの位置に保存する(5b)のタイプと、複合語全体が無核化(＝平板化)してしま

う(5c)のタイプは一般性が落ちる。ちなみに最近の研究によると、(5b,c)の複合語アクセント型をとる後部要素は特定の語種やアクセント型を有するものに限られており、その観点から、これらの複合語アクセント型を予測することがある程度可能となる(Kubozono 1995, forthcoming)。

(5) 後部要素(N_2)が短い複合名詞

a. デフォルト型：前部要素(N_1)の最終音節にアクセント核を付与する
か˥ぶと ＋ むし → かぶと˥むし(カブト虫)
あばれ ＋ うま˥ → あばれ˥うま(暴れ馬)
に˥わか ＋ ゆき˥ → にわか˥ゆき(にわか雪)
そつぎょう ＋ しき˥ → そつぎょ˥うしき(卒業式)
ネ˥バダ ＋ しゅ˥う → ネバダ˥しゅう(ネバダ州)

b. 保存型：N_2のアクセント核が保持される
ペ˥ルシャ ＋ ね˥こ → ペルシャね˥こ(ペルシャ猫)
に˥わか ＋ あ˥め → にわかあ˥め(にわか雨)
マイクロ ＋ バ˥ス → マイクロバ˥ス(マイクロバス)

c. 平板型：全体が無核化(平板化)する
オレ˥ンジ ＋ いろ˥ → オレンジいろ(オレンジ色)
く˥もん ＋ しき˥ → くもんしき(公文式)
しゃ˥かい ＋ と˥う → しゃかいとう(社会党)
じ˥んじ ＋ か˥ → じんじか(人事課)

一方、3拍以上の「長い」後部要素をとる複合名詞は、後部要素の第1音節に複合語アクセント核を置く(6a)のタイプと、後部要素本来のアクセント核を保存する(6b)のタイプに二分される。3〜4拍の後部要素に限定すると、数の上で多いのは(6a)の方であり、これは(5a)と一般化(統合)できる複合語アクセント型である(Kubozono 1995, forthcoming)。

(6)　後部要素が長い複合名詞

a.　デフォルト型：N_2の最初の音節にアクセント核を付与する

みなみ ＋ アメリカ → みなみア˥メリカ(南アメリカ)

ちほ˥う ＋ だんたい → ちほうだ˥んたい(地方団体)

ね˥ ＋ しょうがつ˥ → ねしょ˥うがつ(寝正月)

な˥ま ＋ たま˥ご → なまた˥まご(生卵)

b.　保存型：N_2のアクセント核を保存する

しゃ˥かい ＋ せ˥いど → しゃかいせ˥いど(社会制度)

や˥まと ＋ なで˥しこ → やまとなで˥しこ(大和撫子)

かみ ＋ おむ˥つ → かみおむ˥つ(紙おむつ)

イソ˥ップ ＋ ものが˥たり → イソップものが˥たり
(イソップ物語)

し˥りつ ＋ としょ˥かん → しりつとしょ˥かん
(市立図書館)

ほうげ˥ん ＋ ア˥クセント → ほうげんア˥クセント
(方言アクセント)

(5)・(6)に共通していることは、第一に、前部要素が自立性を失い、有核語は無核化するということと、第二に、後部要素の本来の核を保存するか、もしくは前部と後部の境界付近——(5)では前部の最終音節、(6)では後部の第1音節——にデフォルトのアクセント核が付与されるということである。この二つの操作によって、二語を一語化しようとしている。

2.2　複合化しない複合名詞

次に(3b)タイプの、音韻的に複合化しない複合名詞を見てみる。このタイプの複合名詞については研究が少ないが、一定の意味的条件や構成素(枝分かれ)構造と関連していることが明らかにされている(Kubozono 1988/93, 窪薗 1995)。たとえば(7)にあげた複合名詞は、特定の前部要素、または前部要素と後部要素の意味関係によって、音韻的に一つにまとまりきれず、その結果、両要素の本来のアク

セント型をそのまま残すと考えられる。

(7) 意味制約

a. 特定の接頭辞：ぜ˥ん しゅしょう(前首相)、ぼ˥う だいがく(某大学)

b. 等位構造：チェ˥コ・スロバ˥キア、は˥くしゅ かっさい(拍手喝采)

c. 格関係：か˥じ てつだ˥い(家事手伝い)、おやか˥た ひのまる(親方日の丸)

d. 氏名＋役職：サ˥ッチャー しゅしょう(サッチャー首相)、クリ˥ントン だいと˥うりょう(クリントン大統領)

e. 人名：ゆ˥かわ ひ˥でき(湯川秀樹)、やま˥ぐち ももえ(山口百恵)

(1b)であげた「サッチャー首相」という表現は、(7d)の意味的要因によって一つのアクセント単位に融合しないものと考えられる。興味深いことに、この種の「意味制約」は日本語に特有のものではなく、英語や他の言語の複合語音韻過程でも、類似の意味構造が制約として働くようである(Kubozono 1988/93, Han 1994)。また(7)のような制約が絶対的なものではないことも強調しておく必要がある。たとえば(7a)の接頭辞や(7b)の等位構造では、両要素が2拍以内のもの——前節、某氏、貴社、家々、朝晩、朝夕——であれば、複合名詞全体が一つのアクセント単位にまとまってしまう[4)]。また(7e)の意味構造でも、[姓＋名]という内部構造が不明瞭な場合には制約が働かず、複合名詞全体が一つのアクセント単位にまとまってしまう。「孫悟空」に、姓名の内部構造を意識しない伝統的な発音(ソンゴ˥クウ)と、その構造を意識した新しい発音(ソ˥ン　ゴク˥ウ)の二種類があるのはこのためである。

二語のアクセント融合を阻止するのは(7)のような意味構造だけではない。(8)のように、「右枝分かれ構造」を有する複合名詞——つまり第2要素が第1要素とではなく第3要素と意味的に結合している複合名詞

――でも、第1要素と第2要素が一つのアクセント単位にまとまらず、複合名詞全体が複数のアクセント単位に分離してしまう傾向が見られる[5)]。

(8) 枝分かれ制約

a. [日本 [エア　システム]] → ニホ¬ン　エアシ¬ステム
b. [地方 [公共　団体]] → ちほ¬う　こうきょうだ¬んたい
c. [日米 [安保　条約]] → に¬ちべい　あんぽじょ¬うやく
d. [関東 [大　震災]] → か¬んとう　だいし¬んさい
e. [紅白 [歌　合戦]] → こ¬うはく　うたが¬っせん

このような右枝分かれ構造の複合名詞には第1要素に場所や時間を指定する名詞をとるものが多いが、(8)のアクセント単位分離現象をこのような意味構造に還元することはできない。(8e)の「紅白」のように場所や時間を指定しない名詞であっても、右枝分かれ構造に埋め込まれると同様の現象を示すし、また(8)の複合名詞から右枝分かれ構造を解消してしまうと――「地方団体」や「日米条約」、「日米安保」のように――アクセント単位の分離は起こらないのである。興味深いことに、(8)の枝分かれ制約も日本語にだけ見られる特徴ではなく、英語や他の言語にもしばしば観察されている(Kubozono 1988/93)。

3. 三つ目の複合名詞

3.1 問題点

以上、これまでの先行研究で指摘されてきた二種類の複合名詞の音韻構造を解説した。音韻構造から見たこのような二種類の複合名詞は、英語などの言語にも見られるものであるが、日本語の複合名詞をさらに細かく分析してみると、上記の二種類の複合名詞のいずれにも分類できない第三のタイプの複合名詞が存在することがわかる。これらの複合名詞は、後部要素の形態的特徴から(9)と(10)の二種類に分類できる。

(9) a. みなみ ＋ カリフォルニア → 南カリフォルニア、
*南カ˥リフォルニア

b. ニュ˥ー ＋ カレドニア → ニューカレドニア、
*ニューカ˥レドニア

c. くろみつ ＋ ところてん → くろみつところてん
(黒蜜ところてん)

(10) a. だ˥い ＋ さくしか → だいさくしか(大作詞家)

b. だ˥い ＋ せいじか → だいせいじか(大政治家)

c. なんきょく ＋ たんけんたい → なんきょくたんけんたい
(南極探検隊)

d. で˥んし ＋ けんびきょう → でんしけんびきょう
(電子顕微鏡)

e. がくしゅう ＋ さんこうしょ˥ → がくしゅうさんこうしょ˥
(学習参考書)

f. ちほ˥う ＋ さいばんしょ(˥) → ちほうさいばんしょ(˥)
(地方裁判所)

(9)の複合名詞は岩井・窪薗 (1993)が指摘しているもので、後部要素が5拍以上の長さの無核語の場合、後部要素の第1音節に複合語アクセント核を受ける(6a)のパタンを示さず、複合名詞全体が無核化してしまうものである。5拍以上の無核後部要素を有する複合名詞には(6a)の規則を適用を受ける(11a)のような例も散見されるが、岩井・窪薗(1993)の統計的な研究によると、(9)に比べその数は少なく、また多くの話者にとって、後部要素が無核の状態を保持する(11b)のアクセント構造も許容される。このような事実は、(9)がけっして例外ではないことを示唆している。

(11) アルコール、ハーモニカ

a. エチルア˥ルコール、グラスハ˥ーモニカ

b. エチルアルコール、グラスハーモニカ

これに対し(10)は、McCawley (1968)やOkuda (1975)など多くの先行研究が問題にしてきた複合名詞で、後部要素が3形態素の漢語(つ

まり漢字3文字)から成るものである(先行研究については窪薗 1993を参照)。漢語形態素はそれぞれ1拍ないしは2拍であるため、3形態素の連続では3〜6拍の長さを持つことになる。このような語を後部要素として持つ複合名詞は、従来の規則(6)に従わず、後部要素が無核であれば複合名詞全体が無核となり、語末音節に核を持つ場合にはその核が複合語に保持される、というような規則性を示す。

(9)と(10)の複合名詞は後部要素の語種など形態的な構造こそ異なっているものの、音韻構造では共通している。つまり、後部要素が3拍以上の長さで、もともと無核(平板)ないしは語末核(尾高)であるにもかかわらず、(6)の規則の適用を受けず、後部要素がもともと有していたアクセント型——つまり核の有無と(有核の場合の)核の位置——を保っているのである。このことは(12)の各ペアのアクセント構造を比較するとよく理解できる。

(12) a. みなみ ＋ カリフォルニア → 南カリフォルニア
　　みなみ ＋ アメリカ → みなみア˥メリカ
　　b. ニュ˥ー ＋ カレドニア → ニューカレドニア
　　ニュ˥ー ＋ メキシコ → ニューメ˥キシコ
　　c. だ˥い ＋ さくしか → だいさくしか(大作詞家)
　　だ˥い ＋ さっか → だいさ˥っか(大作家)

3.2 定式化

後部要素のアクセント型が保持されるという意味では、(6b)に含めた「イソップ物語」や「方言アクセント」などの複合名詞も(9)と同じ音韻構造を有していると言える。これらの例は「後部要素のアクセント核を保存する」という意味では、(6b)の中の3〜4拍の後部要素を有する複合名詞——たとえば「大和なでしこ」——と同じ音韻構造を有しているが、同時に「後部要素のアクセント型を保存する」という意味では、(9)のような5拍以上の後部要素を持つ複合名詞と同じ音韻構造を有するとみなすことができる。同様の理由から、(6b)にあげた「市立図書館」の

ように、後部が有核の3形態素連続からなる複合名詞も、(10)と同類とみなすことができる。このように見てくると、(9)と(10)の一見奇妙な複合語音韻構造は(13)のようにまとめることができる。この一般化に基づいて、従来の分析と本稿で提案している分析を比較したのが(14)である[6,7]。

(13) 後部要素が5拍以上、もしくは3形態素であれば、後部要素のアクセント型(核の有無と位置)が複合語に保存される。

(14) a. 従来の分析

N_2≧3拍	[例外]
南ア┐メリカ	南カリフォルニア
地方だ┐んたい(団体)	大政治家
エチルア┐ルコール	
大和なで┐しこ	
イソップ物が┐たり	
市立図書┐館	

b. 新しい分析

N_2=3～4拍	N_2≧5拍、または3形態素
南ア┐メリカ	南カリフォルニア
地方だ┐んたい	大政治家
大和なで┐しこ	イソップ物が┐たり
	市立図書┐館
	[例外]エチルア┐ルコール

ここで、(13)の「後部要素のアクセント型が保存される」という構造変化は、(5b)や(6b)で述べた「保存型」とは異なることに注意する必要がある。(5b)・(6b)で保存されているのは後部要素の「アクセント核」であり、後部要素が無核——たとえば「南アメリカ」の「アメリカ」——であれば、その状態は保存されず、(5a), (6a)のようにデフォルト位置に複合語アクセント核が付与される。これに対し、(9)・(10)で保存されているのは無核を含めた「アクセントの型」である。後部要素がアクセント核を持つ場合には、その核をそのままの位置に保存し、無核語

の場合には、その無核の状態を忠実に保持するのである。「アクセント核の保存」と「アクセント型の保存」という二つの概念を区別することにより、これまでの分析では例外とみなさざるをえなかった(9)・(10)の複合語アクセント型を、一般的な型とみなすことができるようになる。

また(13)の中で「後部要素が3形態素」となっている点にも注意する必要がある。(10)の後部要素は漢語の3形態素であったが、3形態素であれば特に漢語に限定する必要はない。和語や外来語の場合、3形態素の連続はほとんど5拍以上の長さを有することになり、また4拍までの長さであっても、(15)に示すように、(10)の漢語と同じく(13)の規則に従うと考えられるからである。

(15) a. だ˥い ＋ きどりや → だいきどりや、
*?だいき˥どりや(大気どり屋)
cf. にょ˥うぼう ＋ きどり → にょうぼうき˥どり
(女房気取り)
b. にせ ＋ うえきや → にせうえきや、
*にせう˥えきや(にせ植木屋)

3.3 語と句の境界

従来の複合名詞アクセント規則で説明できない(9)・(10)のケースを(13)のように定式化してみたが、ここでこの分析をさらに一歩掘り下げて見てみると、次の二つの疑問が生じる。まず第一に、(9)・(10)の複合名詞は(3a,b)の二つの複合語音韻構造とどのような関係にあるのだろうか。第二に、(13)にあげた、後部要素が「5拍以上」という条件と「3形態素」という条件は、どのような共通性を持つのであろうか。

第一の問題については、(9)・(10)の音韻構造を、2.1節で論じた(3a)の音韻構造と2.2節で論じた(3b)の音韻構造の中間タイプと解釈することができる。(9)・(10)では、前部要素が有核である場合(ニュー、大、地方)にはその核が奪われ、その意味において自立性を失っているにもかかわらず、後部要素は自立性を失わず、本来の

型を保存している。すなわち、前部要素がその自立性を失うという点では(3a)と共通しているが、後部要素が自立性を保っているという点では(3b)と同じである。これらの点をわかりやすくまとめると(16)のようになる[8]。

(16)

	N_1	N_2
南アメリカ 地方団体	非自立	非自立
南カリフォルニア ニューカレドニア 大作詞家	非自立	自立 (＝アクセント型保存)
チェコスロバキア 地方公共団体 日本エアシステム	自立	自立

(3a)が音韻的な「語」、(3b)が音韻的な「句」であるという前述の分析に従えば、(9)・(10)は「語」と「句」の中間に位置する音韻構造と言うことができる。(3)で用いた括弧表示を用いると(17)のように表すことができる。

(17) (A(B))

ところで、日本語アクセントをもう少し広い視野で眺めてみると、(17)のような語と句の中間的構造を有する表現が他にもいくつかあることに気がつく。たとえば同じ複合名詞の中では、(18)のような固有名詞が絡んだ複合名詞が類似の性格を示す。(18)の複合名詞は(7d)と同じ意味構造を有しており、音韻的に一語にまとまりにくいものである。にもかかわらず、(18)のように比較的慣用度の高い表現は、二つのアクセント単位に分離する(i)の発音とならんで、(ii)のように後部要素のアクセント核・アクセント型を保存する発音も許容する。後部要素が完全に自立性を失う(iii)の発音は許容しないところから[9]、これらの複合語表現は、音韻的に二語に分離した(3b)の構造から、部分的

に一語化した(17)の構造へと進展してきたことがうかがえる。同じ固有名詞を含む複合語表現——たとえば「明治天皇」や「明治神宮」——が類似のバリエーション(メ˥イジ　テンノ˥ウ〜メイジテンノ˥ウ、メ˥イジジング˥ウ〜メイジジング˥ウ)を示すのも、同様の変化とみなすことができよう。

(18) 固有名詞が関わる複合名詞

a. エリザ˥ベス＋じょお˥う → (i) (エリザ˥ベス)(じょお˥う)
(ii) (エリザベス(じょお˥う))
(iii) *(エリザベスじょ˥おう)

b. え˥んま＋だいお˥う → (i) (え˥んま)(だいお˥う)
(ii) (えんま(だいお˥う))
(iii) *(えんまだ˥いおう)

複合名詞を少し発展させると、(19a)の「的」という連体性接辞に行き着く。この接辞は先行要素の核を消去し、その自立性を奪ってしまうにもかかわらず、後続要素に対しては何ら干渉しない。(19b)の複合語表現が、後部要素の自立性までも奪ってしまうのとは対照的である。

(19) 接辞の「的」

a. き˥んだい　てき　けんちく → きんだいてき　けんちく
(近代的建築)

b. き˥んだい＋けんちく → きんだいけ˥んちく(近代建築)

格助詞「の」も、一定の条件下で「的」と同じふるまいを示す。この連体性助詞は、2音節以上の尾高名詞——たとえば馬(うま˥)、男(おとこ˥)——に接続する時、(20a)のように先行名詞の核を奪ってしまう(秋永 1981, Poser 1984)。ところがその一方で、(20b)の複合名詞の場合とは異なり、後続要素に対しては何ら影響を及ぼさない。先行要素が音韻的な自立性を失いながら、後続要素は自立性を保っているという意味で、(19)の「的」や(9)・(10)、(18)の複合名詞と同じ性格を有していると言える。

(20) Pre-*no* deaccenting rule
a. うま˥ の いちば˥ → うまの いちば˥(馬の市場)
b. うま˥ ＋ いちば˥ → うまい˥ちば(馬市場)

3.4 フットに基づく一般化

本題に戻って、(9)と(10)の共通性について考えてみる。3.2節では(9)と(10)が「後部要素のアクセント型を保存する」という構造変化上の共通性を有することに着目し(13)のように定式化したが、この分析は「後部要素が5拍以上」という条件と「後部要素が3形態素」という条件を併記しただけで、これらの二つの条件を一般化するには至っていない。前者は拍という音韻単位で測った語の長さであり、後者は形態素(あるいは文字)という形態上の単位で測った語の長さである。両者の間には、リットル(体積を測る単位)とグラム(重量を測る単位)に相当するような違いが存在するように思える。では、この二つの基準に共通するものは何であろうか。

この一般化の第一歩は、(21)のように2拍を一つの単位(フット, foot=Ft)として捉え、かつ、1形態素が最小でも1フットを形成すると仮定することである[10]。(21a)の等式に従えば、(9)の後部要素は3フット——正確には2フットを超える——長さを持つものと解釈され、また(21b)の等式によって(10)の後部要素も3フットの長さを持つことになる(｛ ｝はフットのまとまりを示す)。

(21) フット形成
a. 2拍＝1Ft　　e.g. ｛カリ｝｛フォル｝｛ニア｝
b. 1形態素≧1Ft　e.g. ｛作｝｛詞｝｛家｝、｛政｝｛治｝｛家｝、｛図｝｛書｝｛館｝

(21)の原理に従って(9)・(10)のアクセント構造を再分析してみると、もう一つ新しい知見が得られる。前節で(9)・(10)の複合語アクセント構造を(3a)と(3b)の中間(境界)に位置するものと解釈したが、(21)の原理を採用すると、後部要素の長さと複合名詞の音韻構造との

間に密接な関係があることがわかる。つまり、(5)や(6)のように二要素が一つのアクセント単位に完全に融合する複合名詞は、後部要素が2フットまでの長さを持ち、(9)・(10)のように語と句の中間的な音韻構造を示すものは、後部要素が3フットの長さを持つ。さらに、(8)のように完全に二つのアクセント単位に分離した構造を示す複合名詞は、4フットの長さを持つ後部要素から作られるのである。まとめると(22)のようになる。

(22) a. $N_2 \leqq 2\ Ft \Rightarrow (N_1 N_2)$

南 ＋ {アメ}{リカ} → みなみア˥メリカ

地方 ＋ {団}{体} → ちほうだ˥んたい

b. $2\ Ft < N_2 \leqq 3\ Ft \Rightarrow (N_1 (N_2))$

南 ＋ {カリ}{フォル}{ニア} → みなみカリフォルニア

大 ＋ {作}{詞}{家} → だいさくしか

地方 ＋ {裁}{判}{所} → ちほうさいばんしょ˥

c. $3\ Ft < N_2 \Rightarrow (N_1)(N_2)$

地方 ＋ {公}{共}{団}{体} → ちほ˥う こうきょうだ˥んたい

(22)にまとめた後部要素の長さと複合名詞アクセントとの相関関係については、いくつか但し書きをしておかなければならない。第一に、(22c)の原理は2.2節で論じたすべてのケースにあてはまるものではない。一つのアクセント単位にまとまらない複合名詞の中で(22c)のように後部要素の長さと相関づけられるのは、(8)の枝分かれ制約によって二要素のアクセント融合が阻止される場合であり、(7)のように意味的条件によって阻止される場合はあてはまらない。つまり、意味制約は後部要素の長さとは無関係である。

第二に、(22b)の相関関係にはいくつか例外が存在する。(23)の複合名詞はともに後部要素が漢語3形態素から成るものであり、(22b)の複合語アクセント型が予想されるところである。ところが、(23a)が予想通りの複合語アクセント型を示すのに対し、(23b)は(22c)のアクセ

ント型となる。同じ語構造の複合名詞では(23a)のアクセント型を示すものの方が多いことから、(23b)は例外と解釈される。

(23) a. [[神戸][女　学院]]
　　神戸　{女}{学}{院} →(神戸(女学院))
　　b. [[関東][大　震災]]
　　関東　{大}{震}{災} →(関東)(大震災)

第三に、(22)で述べた後部要素の長さをもう少し慎重に検討してみると、後部要素の単純な長さではなく、構造も関与していることがうかがえる。たとえば(24)の複合名詞は後部要素がともに6拍であり、(21a)の原則をそのままあてはめると3フットの後部要素を有することになる。しかし、(24a)が予想通り(22b)のアクセント型を示すのに対し、(24b)は(22c)と同じアクセント型となる。両者の違いは、(24a)の後部要素が6拍の長さを持つ単純語であるのに対し、(24b)の後部要素が2拍語と4拍語の二語から成っていることと関係あるように思われる。今後類例を集めて、この分析の妥当性を検証してみる必要がある。

(24) a. [[南][カリフォルニア]]
　　南 {カリ}{フォル}{ニア}→(南(カリフォルニア))
　　b. [[日本][[エア][システム]]]
　　日本 {エア}{シス}{テム}→(日本)(エアシステム)
　　[[紅白][[歌][合戦]]]
　　紅白{歌}{合}{戦}→(紅白)(歌合戦)

4. 結び

本稿では、従来の複合名詞アクセント規則では説明できない(9)・(10)の複合名詞を分析し、これらが、単一のアクセント単位に融合する(3a)タイプの複合名詞と、二つのアクセント単位に分離する(3b)タイプの複合名詞の中間に位置づけられることを論じた。つまり(9)・(10)の音韻構造は「語」と「句」の中間的な構造であり、全体として捉え

ると、「語」から「句」の連続性を反映したものと言える。この第三のタイプを含めた三種類の複合語アクセント型は、単に音韻的特性から区別できるだけでなく、それぞれの型が後部要素の音韻的長さから予測できるものである。つまり、フットという音韻的概念を用いると、後部要素の音韻的長さと複合名詞全体のアクセント型の相関関係が明確に捉えられるようになるのである。

以上の分析結果は、日本語において音韻的な語と句(＝語の連続)の境界があいまいであることを示唆しているのみならず、従来の複合名詞アクセント規則が不完全であることをも意味している。つまり、従来の複合名詞アクセント規則では後部要素が2拍(もしくは漢字1文字)と3拍(もしくは漢字2文字)の間に大きな境界があり、3拍(漢字2文字)以上は同類とみなしていたが、より本質的な境界は、むしろ4拍と5拍(もしくは2形態素と3形態素)の間にあり、従来の境界はそれに比べるとはるかに小さいと言うことができる。

*本稿は1995年1月のアメリカ言語学会年次総会と1996年8月のLexicon & Morphology Forum(於東京、津田ホール)で発表した論文に加筆修正したものである。これらの口頭発表にコメントを下さった方々に感謝したい。また本研究はATR受託研究費とサウンド技術振興財団、松下国際財団からの研究助成を受けて行われた日本語音韻研究の一部を報告したものである。

注

1 アクセントという用語があいまい性を持たないように、本稿ではピッチの急激な下降を「アクセント核」、核の有無と(核がある場合の)核の位置によって決まってくるピッチの型を「アクセント型」と呼ぶ。この定義により、いわゆる平板式アクセントはアクセント核を持たないアクセント型ということになる。本稿ではさらに、特定のアクセント型を有する単位を「アクセント単位」と呼ぶ。これらの区別が複合名詞のアクセント構造を理解する上で不可欠となる。

2 (2b)において後部要素は低いピッチとなる(低いピッチ領域に実現する)。これはダウンステップという文レベルのイントネーション現象

であり、語レベルのアクセント現象ではない(Kubozono 1988)。

3 もっとも前部・後部とも短い(2拍以下の)場合には、これほど高い規則性は見られず、音韻的には単純語として扱われている。たとえば(4)の語と同じく、「州」を後部要素とする場合でも前部要素まで短くなると、「属州」(無核語)のように(4)とは異なるアクセント型となるものがでてくる。

4 この場合、後部要素ではなく、前部要素のアクセント核が保存される傾向がある。

5 この枝分かれ制約には少なからぬ数の例外が見られる。(8)と同じ枝分かれ構造を有していても、「エリートバイオリン奏者」などのように外来語を含む場合などには(8)の制約が働かず、一つのアクセント単位にまとまってしまう。

6 (13)・(14b)の新しい分析では「エチルア˥ルコール」のような例が説明できない。これらの少数の例は、話者の意識の中で二つの要素に分析されず、語彙化されている——つまりはじめから一語として扱われている——表現と解釈される。

7 ついでながら、(14b)のように4拍と5拍の間(あるいは2形態素と3形態素の間)に音韻的な境界があると考えることは、けっして一般性の低い分析ではない。繰り返し型オノマトペのアクセントを見ると、4拍以下のもの(例：ゆ˥らゆら)と5拍以上のもの(例：ゆ˥らゆら˥り、ゆら˥りゆら˥り)とでは、アクセントという点からの一語性に大きな違いがあると考えられているし、また、等位構造の複合名詞でも全体が4拍以下になると(7b)とは対照的に一つのアクセント単位にまとまってしまう(例：き˥ぎ(木々)、いえ˥いえ(家々)、あ˥さゆう(朝夕))。さらには、(7a)にあげた「某」タイプの接頭辞にしても、2拍(1形態素)以下の後部要素と結合し、複合名詞全体が4拍以下となる場合には、アクセント単位の融合を示す(例：ぼ˥うし(某氏)、ぜ˥んしゃ(前者))。このように、アクセント現象だけを見てみても4拍と5拍の間に音韻的境界を設定することには独立した根拠が存在する。

8 (16)の三つのタイプに加え、論理的には[自立＋非自立]という4番目の可能性もありうるが、この型は東京方言には実在しない。これは東京方言において後部要素が常に音韻的に主要部として働くことから自動的に派生する結果であろう(複合名詞の音韻的主要部という考え方については窪薗 1996を参照されたい)。ちなみに、(7)の複合名詞の第2要素——たとえば「チェ˥コ スロバ˥キア」の「スロバキア」——が自立性を失っているように思える現象は、アクセント核の消去という語レベルの現象ではなく、アクセント核の音声的弱化というイントネー

ション現象(文レベルの現象)であり、語彙(アクセント)レベルでは[自立＋自立]という構造に他ならない。

9 後部要素がもともと語末の長音節(特殊拍を含む音節)にアクセント核を有する複合名詞には、通常(6a)の規則が適用される。つまり、後部要素の核が奪われ、その第1音節に複合語のアクセント核が付与される(例：しゃ˥かい ＋ じょうけ˥ん → しゃかいじょ˥うけん(社会条件))。

10 2拍を1フットとみなす分析はPoser (1990)など数多いが、本稿の分析は形態素という形態的単位もフットの形成に関与するという特徴を持っている。また漢語形態素を1拍でも1フットと見る分析が立石(1985)に提案されているが、本稿の分析は漢語形態素に限定しないという点で立石の提案とは異なる。

参考文献

秋永一枝 (1981)「東京アクセントの法則について」『明解日本語アクセント辞典』巻末.

岩井康雄・窪薗晴夫 (1993)「東京方言複合語アクセント規則再考」日本音声学会全国大会発表論文.

上野善道 (近刊)「複合語のアクセント」、杉藤美代子監修『日本語音声の新研究』第1巻、三省堂出版.

窪薗晴夫 (1993)「日本語複合語における平板化形態素の作用域について」『日本語・日本文化研究』No 3, 大阪外大.

——— (1995)『語形成と音韻構造』、くろしお出版.

——— (1996)「英語の複合語アクセントについて」『言語の深層を探ねて：中野弘三博士還暦記念論文集』英潮社.

佐藤大和 (1989)「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『日本語の音声・音韻(上)』(講座日本語と日本語教育2)、明治書院.

Han, E. (1994) *The Prosodic Structure in Compounds*. PhD dissertation, Stanford University.

Kubozono, H. (1988) *The Organization of Japanese Prosody*. PhD dissertation, Edinburgh University. [Kurosio, 1993].

——— (1995) Constraint interaction in Japanese phonology: Evidence from compound accent. *Phonology at Santa Cruz* 4, University of California at Santa Cruz, 21-38.

——— (forthcoming) Lexical markedness and variation: A nonderivational account of Japanese compound accent. *WCCFL 15*.

McCawley, J. D. (1968) *The Phonological Component of a Gram-*

mar of Japanese. The Hague: Mouton.

Okuda, K. (1975) *Accentual Systems in the Japanese Dialects: A Generative Approach*. 文化評論出版。

Poser, W. (1984) *The Phonetics and Phonology of Tone and Intonation in Japanese*. PhD dissertation, MIT.

——— (1990) Evidence for foot structure in Japanese. *Language* 66, 78-105.

Tateishi, K. (1985) *Accent of Compound Nouns in the Standard Japanese: A Nonlinear Analysis*. MA thesis, International Christian University, Tokyo.